『晃嶺秘鑑』と寛文二年（1662）稲荷川災害

株式会社 防災地理調査　今村隆正

１．はじめに

私たち土砂災害の研究者が過去の災害を調査する際，歴史資料の原本調査をすることは少ないのではないだろうか．特に江戸時代等の古文書の記録を自ら解読することはほとんどなく，先行研究の既往文献があれば，それを孫引き的に引用することが繰り返されていることが少なくない．近世文字や歴史の専門家ではない私たちにとっては仕方のないことではある．しかし，先行研究に解釈や考え方の相違などがあった場合，そのまま繰り返し引用されてしまいがちである．

今回は，寛文二年（1662）稲荷川災害について，古文書の原本調査を行った結果を発表する．

２．寛文二年（1662）稲荷川災害

寛文二年稲荷川災害とは，寛文二年六月八日から十三日（1662.7.23～28）にかけて，日光地方で降り続いた大雨を誘因に，稲荷川上流から大量の土砂と水を含んだ山津波が流下し，現在の稲荷川と大谷川の合流点から直下流付近を中心に大被害が発生した災害である（図 1）．

人的被害の記録を同時代の古文書から見ると，「寛文二年六月，日光山，八日より十三日までの大風雨によって山水押出し，山麓の市中で百四十余人死亡」（『厳有院殿御実紀』），「六月十三日の洪水で，いなり川町などが被災し，九百十五人が被災し，百四十八人の死者」（『竹橋余筆』）と記録されている．厳有院とは第四代将軍家綱のことである．通称『徳川實紀』と呼ばれる江戸幕府編纂の正史である．『竹橋余筆』は，江戸幕府勘定所記録の抄録集で，当時の日光の役人が，同年六月二十三日に幕府へ被害状況を詳しく伝えた文書である．いずれも幕府の正式記録であり，信頼してよい．

さて，この時の土砂生産源は稲荷川上流のどこかであったのか，また，この災害以前から稲荷川上流に湖水があり，それが決壊したという説もあるが，その根拠は何なのか，本発表では，そこを明らかにしたい．

下流平野部における土砂氾濫堆積域については，日光砂防事務所によるテストピット調査を含む詳細な調査が行われて来たことで，ほぼ明らかになっている（図 1）．日光市街付近の広い範囲で土砂が氾濫堆積し，多くの被害が発生したことが容易に推定できる．

日光市の龍蔵寺墓地には，この災害の犠牲者を弔う「稲荷川水難供養塔」が建立されている（写真 1）．

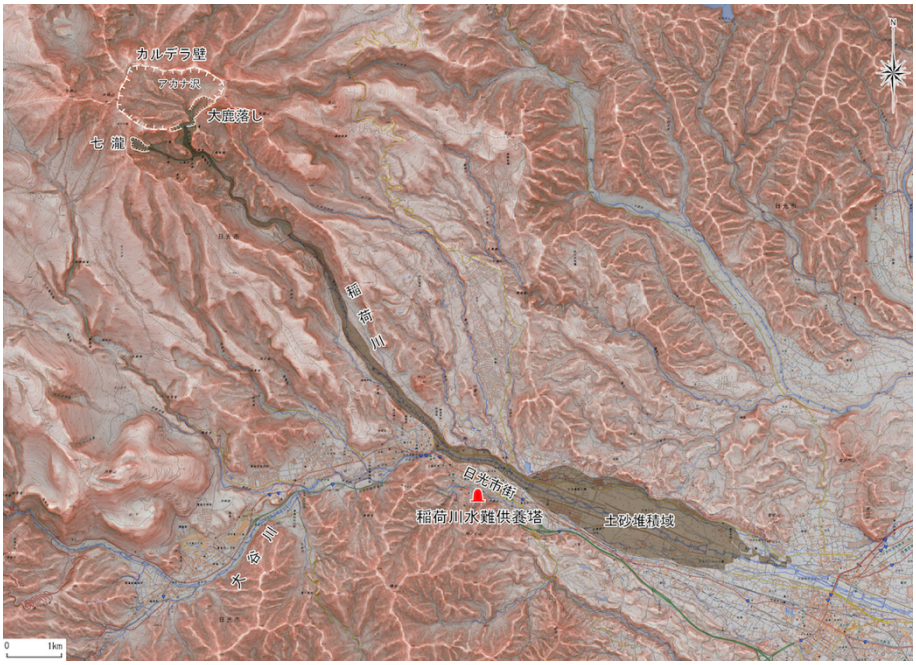

図１　寛文二年（1662）稲荷川災害の土砂災害状況推定図
（基図：アジア航測株式会社，赤色立体地図）

写真１　稲荷川水難供養塔
（2021 年，今村隆正撮影）

３.『光嶺秘鑑』（日光東照宮所蔵）の古文書調査

寛文二年稲荷川災害において発生した山津波の，その発生源や発生要因に関する先行研究のほぼ全ては，『光嶺秘鑑』を出典としている．すなわち，『光嶺秘鑑』に記されているとされる「稲荷川の最上流部にあった湖水が決壊した」を出典とし，孫引き的な引用が繰り返されてきたと考えられる．

ところで，『光嶺秘鑑』とはどのよう位置づけの古文書であるのか．『光嶺秘鑑』は，日光地方の地誌『日光山志』の草稿である．著者は，日光東照宮の火之番，八王子千人同心の組頭であった植田孟縉である．全４巻で構成されており（写真 2），草稿ゆえ著者の意見や考えなども，ところどころに書かれているのである．

写真 2　『光嶺秘鑑』（日光東照宮所蔵）
（2021 年，今村隆正撮影）

詳細に解読していくと，「稲荷川は小さな川なのに，寛文二年にどうしてこのような山津波が発生したのか，古くから七瀧の辺りに湖水があり，その東側の一部が切れて津波のように押し出したとも考えられる」という記述は確かにある．しかし，この記述は，前後の文章も含めて解読するとわかるのだが，著者植田孟縉の私見としての仮説なのである．そして，正規版として発行された『日光山志』では全て削除されているのである．

４．まとめ

寛文二年稲荷川災害において，稲荷川で発生した山津波の発生源や発生要因が記されているといわれている『光嶺秘鑑』について，古文書の原本調査を行った．その結果，以前から最上流部付近に存在していた湖水が決壊したという記述は，実際の災害現象を記録したものではなく，筆者植田孟縉の私見（仮説）であったことがわかった．

稲荷川上流は，オーバーハングも多い深い渓谷である．このような渓谷に数日間に及ぶ豪雨があれば，斜面が大きく崩れ一時的な堰止め（天然ダム）が発生することも十分に考えられる．「以前から湖水があった」という記述は，著者植田孟縉の私見（仮説）であったが，寛文二年の豪雨を誘因として斜面が崩れ，天然ダムが形成され，それが決壊したことで大規模な山津波が発生したことは十分に考えられる．

我々は，古文書調査が専門ではないが，近世文字の専門家に解読を任せてしまうことなく，土砂災害の専門家という視点において，辞書を引きながらでも自ら原本調査を行うことは大変重要である．今後も，再検討が必要と考えられる過去の災害事例については，原本調査に取り組んで行きたいと考えている．

５.文献

今村隆正（2024）：栃木県の土砂災害の歴史（前編），水利科学 No.397（第 68 巻第 2 号），142p.
宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子(2013)：日本被害地震総覧 599-2012，東京大学出版会，694p.
植田孟縉：『光嶺秘鑑』，日光東照宮所蔵.
植田孟縉：『日光山志』，国立国会図書館所蔵.
国土地理院：地理院地図（電子国土 Web）.
『竹橋余筆』，国立国会図書館所蔵.
『徳川實紀』，国立国会図書館所蔵.
日光砂防事務所：まちといのちを守る砂防 日光稲荷川 寛文二年の土砂災害を辿る.